

「揺らぐ」ことも、社会に出る前の大学生・大学院生にとっては貴重な経験である。今後は定量的な変化と定性的な語りを併せて今回の結果の分析を進めると同時に、Cultural Competence の測定方法についても再考していく所存である。

### 3-4. 外部評価

外部有識者から評価を受けプログラムの質の向上を図るため、GRIP 推進委員会の規定を整備し GRIP 外部評価委員会を置くことを定めた。GRIP 外部評価委員会は、日本、提携大学の所在国、並びにアメリカ等の国外の有識者を委員とし、年に 1 回開催する。一年間のプログラム運営のプロセスおよび学習成果を、本年次報告や参加学生による最終プレゼンテーションの動画等の記録を基に客観的に評価していただき、次年度以降のプログラム改善の基盤とする。

2022 年度の外部評価委員会は、2023 年 6 月に zoom で日本とアメリカを繋ぎ実施された。それぞれ、異文化感受性、国際交流プログラムの評価、地域創生に精通した 3 名の外部評価委員の先生より、プログラムの目的や問題解決に取り組む際の各国の社会システムの捉え方等について質問をいただき、活発な議論が交わされた。

プログラムの強みとして特に評価していただいたのは以下の 6 点である。

- (1) 正規科目・副専攻として位置付け長期的な実施を可能とする枠組みを構築した点
- (2) レベル別の学習達成目標を設定している点
- (3) 自国と他国の双方の文化理解や双方向の学びを意図している点
- (4) これまで千葉大学で実施してきた IPE の経験を活かしている点
- (5) 学生の学びのプロセスを考慮し渡航前から帰国後までの学習をデザインしている点
- (6) 協定校と密にコミュニケーションを取り協働体制を築いている点

また、課題としては以下の 8 点が挙げられた。

- (1) カルチャージェネラルなナレッジ・フレームワークの導入
- (2) プログラム終了の先にある将来的なビジョンの検討とプログラム概要への包含
- (3) 国内の異文化・国内の多様性（ミクロなダイバーシティ）という観点の統合
- (4) フィールドノートを活用した経験のリフレクションの仕組みの改善
- (5) 最終的なアウトカムの評価指標および方法の検討
- (6) 学生にとっての履修・専攻の意味の明確化とブランディング
- (7) 少ないマンパワーで持続的にプログラムを回すための仕組み作り
- (8) 社会システムに捉われない（あるいはそれを壊すような）知見やスキルの獲得

外部評価委員会終了後にいただいた最終評価票では、プログラム全体の進捗状況について3名の外部評価委員のうち2名が「予定どおり進展」、1名が「予定を越えて進展」と評価した。その理由として自由記述欄に記載いただいた内容は以下の通りである。

- 予定と実際の進展状況を比較したとき、紙面上では「予定どおり進展」と見立てられる方もあるかもしれませんが、私はあえて「予定を越えて進展」を選択しました。新しい取り組みの初期というものは、想定外の出来事が起こることも多く、往々にしてすべてが遅れ気味になったり、計画の一部が大幅に削られてしまったりするものだと思います。今年度のレポートを拝見する限り、GRIP に関してはそれが見受けられません。非常に賞賛に値することだと思います。コロナ禍により起きた影響、文化的差異から起きたスケジュール等の調整の必要性、参加者の健康問題等、様々な軌道修正要因があったようですが、それぞれに適切な対応をされてきたことが伺われます。それらを総合的に考慮して、「予定を越えて進展」していると判断します。
- 初年度である 2022 年度は、インドのシンバイオシス大学とのトライアル的なプログラムとして開始されている。その中で、教材を作り込み、学生を相互に行き来させて教育を実施する段階に入っており、プログラムの評価や持続的改善につなげるという計画通りに進められていると思われる。プログラムの計画は、これまでの千葉大における海外の大学との協力関係を利用して行われている。互いの特色や強みを活かしたプログラム内容となっており、実際に学生が互いの国のプログラムに参加することで、計画していた学びがなされるだけでなく、例えば互いの置かれている生活基盤の大きな違いなどからも様々な学びが生じた印象がある。プログラムのプロセスは、想定通りに進められたと思われる。教育プログラムは問題点に小さな問題があったとしても学習の質を損ねてしまう可能性があるため、想定通りの進捗がなされたことは重要性が高い。プログラムのアウトカムは、想定通りの結果が出ている部分、出していない部分がある。これは、本事業プログラムが研究という意味合いも強く帯びており、プログラム評価に用いられている既存のアウトカム指標が学生の学びを広い形では捉えきれていないことを示す可能性がある。プログラム評価が、元々設定された指標による評価を中心になされるべきかどうかについては、プログラム評価の視点の違いの議論がなされることも重要かもしれない。例えば Fitzpatrick らによる Program Evaluation: Alternative Approaches and Practical Guidelines (4th Ed., 2010)の記載によると目的志向型で今回の評価が行われていると思われるが、マネジメント志向型、消費者志向型、専門家志向型、自然および参加者志向型といった視点での評価も考えるとよいかもしれない。
- 「カリキュラム・マップによる学習到達目標の明確化と質保証」については、学習到達目標の明確化は難しいところである。特に、双方の大学が関係する場合、目標と、その到達方法・手段は、異なるだろうから、それほど時間はないかもしれないが、相互理解を深め丁寧に進める必要がある。それらの難しさ、問題は、相手方の

ヒアリングからもでているところであるが、このようなフィードバックを得ながら、改善できる仕組み、体制を整えているところは評価できる。